

京都市地域・多文化交流 ネットワークサロン通信

発行日 2018 年 3 月 30 日 編集・発行 京都市地域・多文化交流ネットワークサロン 第 25 号

東九条の歴史が私たちに語ってくれること

初めて東九条を訪れた 1989 年、在日コリアン一世のハイベ（じいちゃん）から、「お前ら若いもんにはしらのことを話したってどうせ分からへんやろ！」と言われました。日本にコリアンが住んでおられることを知らなかった当時の私は、逆に「どんな人生だったんだろう」と、とても興味を持ちました。それが、在日コリアンの歴史、そして東九条の歴史を知るきっかけとなりました。

私が東九条に来た頃、希望の家周辺は、長屋の外に共同炊事場があり、路地が多く、家が密集していて、不安定な住環境でした。一方、子どもから高齢者まで人が多く、厳しい生活をされている方も多い中、まちは活気に満ちていました。

そのようなまちの形成は 1910 年頃に遡ります。京都駅の改築に始まる土木事業の活発化に伴って、日本の労働者が増加し、さらに、朝鮮半島で土地や食料を奪われ、やむをえず渡日したコリアンたちも、仕事を求めて京都駅周辺に集まりました。

日本の敗戦後、京都駅周辺の人口はさらに増え、住環境が悪化、貧困や子どもの教育問題、東九条地域やコリアンに対する深刻な差別等が起きました。それら、さまざまな課題に向き合い、声を上げ続けた住民や支援者の血のにじむような運動は、挫折を何度も乗り越え、人々の大きなパワーとなり、それを機に、障がいのある人やルーツの異なる人も新たに地域に住み、まちづくりに参画してくれるようになりました。

「上がってコーヒーでも飲んでいき！」といつも迎えてくれたハンメ（ばあちゃん）、時に怒り、大笑いし、私を育ててくれたおっちゃん。東九条に生きた人たちの強く温かい存在や、生活の痕跡は、私たちに語り掛けてくれます。大切なことは人のつながりであり、困難があってもあきらめず、明日につないでいくこと。受け継がれてきた東九条の「人々の歴史」から届くメッセージが、一人ひとりの「私」を通して「あなた」へと引き継がれていくことを切に願っています。

（村木美都子 東九条まちづくりサポートセンター まめもやし）



東九条を知る学習会「東九条の歴史～4 ヶ町編」(3/2) 報告

講師：前川 修（希望の家所長/京都市地域・多文化交流ネットワークセンター長）

今、東九条は「京都駅東南部エリア活性化方針」の査定に伴い、まちと芸術が会うとりくみが進められています。私たちは、まちの未来に期待しつつ、歴史を受け継いでいくことも大切にしていこうと学習会を企画しました。ここに掲載されているものは、ごく一部ですが、みなさまにも興味を持っていただけると嬉しいです。

※京都市地域・多文化交流ネットワークサロン事業は、「希望の家」が京都市の委託で行っている事業です。

<希望の家の歩み>

希望の家は来年の4月で60年を迎えます。希望の家がなぜ誕生したのか、というところからお話したいと思います。初代所長ディフリー神父は、「黒人は皮膚が黒い。しかし、部落の人はふつうの日本人と同じではないか。差別なんてもってのほかだ。私の仕事は差別をなくすことなのだ。」（毎日新聞1960年3月13日）」と語っています。ここでいう

「部落」は、被差別部落のことではなく、困難な状

態の地域を「部落」と言っています。アメリカ人での黒人差別の状況と東海道線の車窓から見た風景から、「私の仕事は、差別をなくすことだ」と思いいたったようです。

希望の家が発刊していた機関紙で、二代目所長のマンティカ神父が、「崇仁や東九条の人々が、彼等の生れと家系のために差別されているという事実です。私たちはなんらかの方法で、この偏見を打ちこわさなければなりません」と語っています。50年も前に、希望の家の目的は偏見を打ちこわすことだと言っています。

希望の家が最初にできたのは、東九条ではなく崇仁学区の屋形町で、今の「ひかり公園」の中でした。この地域で始まったのは子どもたちのための事業です。「希望の家」と名付けたのも大人ではなく、そこを利用している子どもたちなのです。希望の家カトリック保育園前園長の崔忠植先生が、こんなイメージを語っています。

「温かみのあるこの学習場にあふれるばかりに群がった少年の一人が、『神父さん、この家に来るのが楽しいわ、希望が湧いて来た。そうや!!この家の名前を“希望の家”にしたらどうや』と神父に言った。(中略)それから



当時の希望の家の子どもたち



ディフリー神父が東海道線から見た風景と同じ辺りの様子

十年間、診療・保育園・貯蓄組合・学習所・学童保育と地域に根差した働きが展開されていった。

25年前に「希望の家」と名付けた少年は今は40歳の中堅。その少年はどうしているのだろうか。

(中略) 在日朝鮮人2世としてあらゆる差別に抗しきれず、帰化をして生活の場を確保しようと苦もんするあのA氏なのか。この地で生活をきると言いかけ、希望の家を支え、青少年健全育成に寸暇をおしんで奉仕しているI氏がその少年か。通称0番地といわれ、在日朝鮮人が85%を占め

る 180 世帯のバラックに住む住人を組織し、水道と避難橋設置を強く行政に働きかけ、血の汗の闘かいをしたあの K 氏なのか。」(1984 年)

崔先生が保育園に来られた時に感じた状況と、「希望の家」と名付けた少年をだぶらせながら書かれた文章です。その当時の地域の状況を、本当によく表した文章だと思います。

1960 年、希望の家は屋形町から今の希望の家カトリック保育園の場所に移ってきます。カマボ



カマボコ型の希望の家

コ型の希望の家と言われていましたが、これは米軍が使っていた兵舎です。当時のこのあたりの状況は、高瀬川沿いに家が密集し、路地の奥にまた路地、家の奥にまた家、といった様子でした。私が初めて東九条に来た 80 年代でも、外で炊事をしていたり、夏場にはノリモノが少し胸をはだけながら「暑いな〜」とうちわであおいでいたり、路地に洗濯物がいっぱい干している中をすり抜けていました。路地が迷路のように続き、どこにいるのかわからなくなるような感じでした。バタ屋さんがたくさんいて、廃品回収をしている車（リヤカー）がいっぱい並んでいるのも当時の光景でした。

希望の家は、その時の東九条地域でいろんな活動をしていました。診療もしていて、お医者さんがボランティアで来ていました。住民にとって必要なものを生み出す、必要がなくなったら解散するというのが希望の家の特性でした。「増築の日近い 希望の家」というタイトルの新聞記事に、カマボコ型の希望の家が手狭になって「ディフリース神父を中心に“こんばん会”の大人連中が『町ぐるみで増築しよう』と衆議一決、積極的な運動にのりだすことになった。(中略) 仕事から帰ってきた日雇いさんもポケットからヨレヨレの千円札をつかんで寄付箱に入れた。児童部の子どもたちもおこづかいを寄せた」とあります。地元のみなさんがお金を出し合って希望の家が建った、ということを忘れてはいけないと思います。1977 年には、希望の家児童館が開設します。学童保育は小学生だけですが、児童館は 0 歳から 18 歳まで遊びに来ることができることが特徴です。

<人権の視点から新たなまちづくり>

6 代目の所長、越智健神父（1979 年 4 月〜）は、部落問題や人権問題にすごく熱心に取り組んだ方なので、希望の家は人権の視点、また崔忠植先生が保育園に来られたことで、多文化の視点というものが取り入れられていきます。7 代目の所長、ロベス神父（1989 年 5 月〜）の頃にはかなり多文化色が出て、バザーのステージでも南米の方の演奏など民族的なことが増えていきました。それまでの希望の家というのは、あまり民族的なことを表に出すことはありませんでした。もしかしたらアメリカ人の神父さんにとって、同じ顔つきをしているアジア系の人たちが日本人かコリアンかという区別がつかない状態だったのではないかと思います。なぜ差別するのかがよくわからない、ということがあつ



バタ屋さんのリヤカー

たのかもしれませんが。徐々に民族的なものが取り入れられてくることが、今のネットワークサロンの流れにつながっていると思います。

＜地域と共に＞

私が学生の時に初めて希望の家に来た時、希望の家の倉庫にはたくさんの畳がストックされていた。柔道クラブがあって地域の方が熱心に青少年たちを指導されていたのですが、もう一つの理由は、火事が多い地域だったため、希望の家は避難所の役割を果たしていたのです。今も希望の家児童館にはたくさんの畳がストックされています。子どもたちの取り組みにも使いますが、災害などの時にも使えるようにしています。

この地域では、「地上げ」もありました。その時も地域の方たちの運動を一緒に行っていく場、地域を支え一緒に歩いていく希望の家だったと思います。「(地上げの暴力団関係の)〇〇興業の方とは一切お話をしません。何かあれば弁護士の〇〇のところに電話してください」と、電話番号を書いた紙を、地上げにあっている家の前に貼っていました。住民さんは暴力団が来ると、どうしても怯んでしまいますから、その時には張り紙を指さしてくれたらいい、相手にしなくてもいいから、と話していました。



1990年5月29日 京都新聞

＜東九条対策の終了と、幅広い多文化共生の動き＞

この建物(京都市地域・多文化交流ネットワークセンター)が建った理由を説明したいと思います。京都市は、「旧同和地区の環境改善が大きく進みニーズも変化した」との理由から、2009年4月から同和地区のコミュニティセンター(隣保館)にいた市職員を撤退させ、コミュニティセンターを民間委託しました。同和地区では



京都市地域・多文化交流ネットワークセンター。
現在の地域福祉センター希望の家と希望の家児童館は、このセンターの中にある。

ない東九条にも、旧希望の家の横に生活館という、隣保館に準ずる建物がありました。そこからも市職員が撤退しました。生活館の方は民間警備会社が建物の管理をおこない、希望の家は東九条の隣保事業の受託をしてきましたが、2011年3月31日でこれも終了しました。今の希望の家が入っている建物は、同和事業の見直しがおこなわれる前に、設計図が出来上がり、建

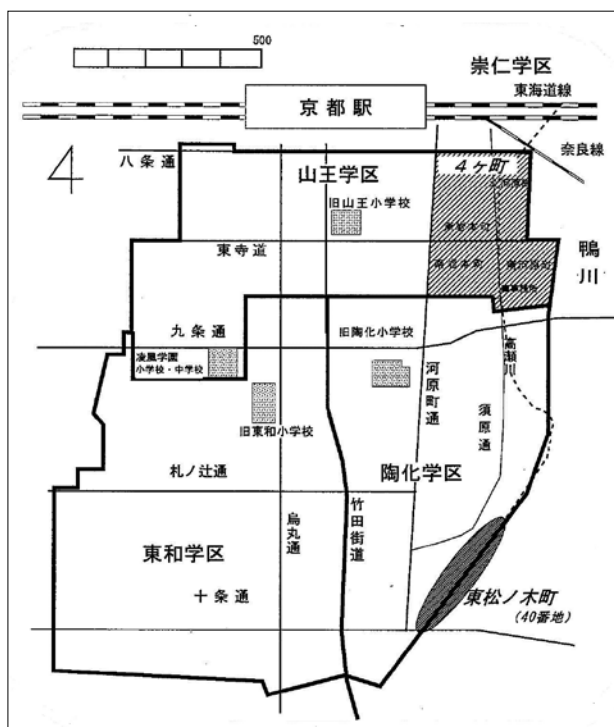
設費用も予算化されている状態でした。つまり、ハードは作られるのに、ソフトがなくなってしまったのです。当初の計画では、この建物の中には希望の家と生活館が入る予定だったのです。今皆さんがいらっしゃる部屋(多目的コーナー)に入る手前の部屋(事務室)では、生活館の市職員が働く予定でした。この多目的コーナーは、老人福祉センターみたいな役割をする予定だったのです。ところが、その計画は同和事業の見直しで 2009 年 4 月に吹っ飛んでしまったのです。建設が始まる直前にソフトがなくなったわけですから、どうしようかということで、担当課が考え出したのが、この京都市地域・多文化交流ネットワークサロンの



2017 年 4 月 22 日、第 6 回東九条春まつりの多文化交流ステージの様子。ネットワークサロンの登録団体の協力により、毎年行われているまつり。2018 年度は 4 月 21 日(土) ネットワークセンターにて開催予定

です。急に出来た事業ですから、京都市としてもこなれてない、よくわからないということがたくさんありました。最初の 5 年間はもともと東九条の隣保事業を担当していた地域福祉課が担当していたのですが、地域福祉課の皆さんはわけがわからない状態だったと思います。市議会でも、「なんで地域福祉課が多文化を扱うんだ、国際化推進室が担当するべきだ」という意見もあって、今は国際化推進室が担当になりました。地域福祉課が担当の時は、多文化という概念が共有することができないため、大変苦労しました。地域福祉課の担当の皆さんは多文化とは、「民族のこと、国際的なことだ」というふうに言われ、いろいろと議論はしたんですが、結局噛み合わないため、無駄な議論はやめて事業をやりましょうということになりました。

その時に議論になったのは、希望の家が 50 周年を迎えた時に私が書いた文章です。私が作り出したものではなく、東九条の多文化共生とは、こういうことだとまとめた文章です。この東九条でやってきた多文化共生というものが、今、東九条の中でおこなわれている新たなまちづくりの指針となっている『京都駅東南部エリア活性化方針』の中で言われている「幅広い多文化」という概念に当てはまるものだと思います。多文化共生とは、外国籍市民と日本人が仲良くしていきましょうという単純なものではなく、年齢が違う者、価値観が違う者、心身の状況が違う者、それぞれがお互いを認め合う社会が真の多文化共生、幅広い多文化共生だということです。現実の中で、生活の中でそれを実現していくことは、生やさしいことではなく、血の出るような努力の繰り返しだと考えています。希望の家の歴史は、この「幅広い多文化共生」を求め続ける歴史だと思います。



東九条の全体図 (2012 年東九条を知るために より)

たけのこ会を 知っていますか？

スタッフ・ボランティア・保護者
のみなさんからのコメント集

活動日時：毎月第2日曜日午後2時～5時（変動あり）

活動場所：京都市地域・多文化交流ネットワークセンター

※送迎が必要な場合はご相談ください。

参加対象：小学生から高校生までの外国につながる子どもたち

連絡先：京都市地域・多文化交流ネットワークサロン

☎075-671-0108

今野弘美（たけのこ会スタッフ / 京都バグアサ・フィリピンコミュニティ）

<たけのこ会への思い> たけのこ会の活動は2011年の冬から始まりました。活動内容としては、外国にルーツを持つ子どもたちへの学習支援を行っています。当初は、フィリピンルーツの子どもたちが主に参加してくれていました。現在では、フィリピンルーツ以外の子どもたちも参加してくれるようになりとても国際的になってきました。参加してくれている子どもたちは、小学生や中学生、高校生くらいの年齢で来日して学校に通っている子どもや、日本で生まれ育った子ども等、背景は様々です。1人1人の抱える問題は背景によって様々ですが、一番多いと感じるのは、ことばの壁です。来日して間もない子は、日本語があまりわからず学校の授業についていけなかったり、日本語を流暢に話していると思ったら、日本語の読み書きがままならない等。たけのこ会は、そのような子どもたちの学びの場、そして他の子どもたちとの交流の場といった居場所となれればと思っています。

<子どもたちへの思い> たけのこ会に参加してくれている子どもたちには、たけのこ会での出会いをきっかけとして、今抱えている問題や学校の事など、何でも語り合っていける友だちを作ってほしいと思っています。

最後に 外国にルーツを持つ子どもたちは、将来、日本と海外との架け橋となってくれる豊かな可能性を持っています。子供達の可能性を摘んでしまわないように、学習の保障を社会に求めて行かなければならないと思います。

鳴橋杏里（京都教育大学学生ボランティア）

私は2年前から、ボランティアとしてたけのこ会に参加しています。活動を通して一番に感じることは、たけのこ会の居場所としての意味合いの強さです。近年外国にルーツを持つ子どもたちは増えてきていますが、学校ごとに散り散りになっているため、同じような背景を持つ子ども同士が出会える機会というのはそうそうありません。たけのこ会が彼らにとって貴重な場であることは間違いありません。

実際に活動する中で、私はそれをより強く感じています。いつもとても印象的だと思うのは、英語やタガログ語といった子どもたちのルーツの言葉が飛び交う場面が多々見られることです。私たちの方が取り残されてしまうこともあるくらい、ルーツの言葉で盛り上がって話していることもあります。また、日常の出来事や身の回りのちょっとしたことについて話している時にも、「フィリピンでは～～～なんやで」と教えてくれたりすることもあります。

このように、子どもたちには自分のルーツをどんどんアピールしている様子も見られ、その度に、ここでは安心して自分を出ることができるのだなあと感じています。ルーツを恥ずかしがって隠したりすることなく、のびのびとしている子どもたちにとって、たけのこ会は居場所としての大きな意味を持っているといえるでしょう。

そして、このような子どもたちやその居場所となる場の存在を実際に参加して学べるという点において、たけのこ会は、教師を目指す私たち学生にとっても貴重な場であると感じています。

Maria Ricca Datu Fernandez (保護者 / 京都バグアサ・フィリピンコミュニティ)

Our children wanted to experience playing and talking(in Filipino) with other children with Filipino roots in TAKENOKO KAI. We wanted our children have fun and enjoy their childhood and to grow up a responsible person as well as have a clear idea of their cultural roots and its values.

子どもたちの方は、たけのこ会でフィリピンルーツをもつ他の子どもたちと、(フィリピン語で)遊んだりしゃべったりする体験を欲していました。私たち親としては、わが子が子ども期を楽しく過ごして信頼される人間に育ち、同時に、自らの文化的ルーツと価値観について、しっかりとした考えを持ってほしくて参加させました。

浜田麻里 (京都教育大学教員 / 京都教育大学帰国渡日児童生徒つながる会事務局)

たけのこ会は「京都バグアサ・フィリピンコミュニティ」と「京都教育大学帰国渡日児童生徒つながる会」の出会いから始まりました。「たけのこ会」という名前は当時活動していた学生がつけました。フィリピンの文化に縁の深い「竹」にちなんで、子ども達が竹のようにまっすぐ、すくすくと育ってほしいという願いが込められています。

2013 年からは京都市地域・多文化交流ネットワークセンターの場所を使わせていただくことができるようになりました。教育大以外の学生も支援に加わってくれました。フィリピン研究者のみなさんは保護者の支援を含め、ずっと活動を支えてくださっています。最近では、さらに多様な方々がたけのこ会に集まり、活動を盛り上げようと知恵と力を出し合っています。会場には来ないけれども、広報面など、陰ながら支援してくださっている方もいらっしゃるようです。集まる子どももフィリピンルーツに限りません。

たけのこは雨が降るたびにどんどん伸びて、放っておいてもあつという間にりっぱな竹になります。でもたけのこ会は、立場のちがう人々がそれぞれに愛情の雨を降らせ、時間とエネルギーを注ぐことがなければ、ここまで育つことはできなかったでしょう。ただ同時に私自身、たけのこ会を通じて様々な人と出会えたおかげで別の場面で反対に助けられることも多くあります。

多様な人々が出会うことができるようになったのは、たけのこ会が「毎月第 2 日曜日 2 時から、ネットワークセンターで」という「定位置」を得たことの意義が大きかったと思います。たけのこ会は子ども達の居場所であるだけでなく、たけのこ会を支える大人達の居場所にもなっています。



たけのこ会は京都バグアサ・フィリピンコミュニティと京都教育大学帰国渡日児童生徒つながる会が共同で行っています。
京都市地域・多文化交流ネットワークサロンは「たけのこ会」の運営に協力しています。

LA LA KITCHEN



2011 年、ネットワークサロン事業がスタートしてから、「世界の料理教室」「おべんとう教室」「SHOKUIKU（食育）」など、外国につながる方々が先生になったり、生徒になったりしながら料理教室を行ってきました。そして、2017 年度は「LA LA KITCHEN」を計 4 回開催しました。参加者のリクエストで、魚の煮つけ・だし巻き卵、お好み焼き・やきそば・デコレーションケーキ、おはぎ・苺大福…を作りました。今回、すべての講師を引き受けてくださった服部千鶴さんよりコメントをいただきました。服部さん、一年間ありがとうございました!!

LA LA KITCHEN での一年

お声かけを頂いたとき、「安請け合いをしたのではないか。迷惑をおかけすることになるのではないか。調理師とは名ばかりの自分ですのに。」と。ですが、『一期一会』お引き受けした以上は、責任をもち、練習を重ね、レシピを記し、わかりやすくお伝えすることに努めようと考えました。皆様、そのレシピ等を携帯で撮られ、質問もあり、熱心にご参加くださいました。あるシスターは、生まれて初めてのだし巻き卵が上手く巻けたと、大喜びされました。デコレーションケーキを作ったとき、箱に入れ、各々大事そうに持って帰られました。最終回るとき、その後何度も焼いたケーキの写真を見せて下さいました。おはぎは、似たようなものがフィリピンにもあり大好きだと、故郷を懐かしんでいる方がおられました。苺大福は苺と餡を餅で包むのですが、手に餅がつき～悪戦苦闘。陽気な方々。唄ったり踊ったりの料理教室です。「今度はパンを作りましょう。」…最後の日、そう仰って頂いたこと、とても嬉しく、皆様との出逢いに感謝です。多文化交流、次は私にもフィリピン料理を教えてくださいね。

今回、家で練習することで、娘との貴重なときをもつことができたことも、喜びのひとつです。

本当に貴重な体験をさせて頂き、ありがとうございました。(服部 千鶴)



□ 所在地：〒601-8006 京都市南区東九条東岩本町 31 (京都市地域・多文化交流ネットワークセンター内)

□ TEL: 075-671-0108 □ FAX: 075-691-7471 □ E-Mail: info@kyotonetworksalon.jp

□ 開館時間: 9 時～17 時 □ WEB サイト: <http://www.kyotonetworksalon.jp>

□ JR 京都駅八条口・京阪東福寺駅・市営地下鉄九条駅より徒歩 15 分

京都市バス 42・202・207・208 系統 九条河原町より徒歩 10 分／84 系統 河原町東寺道より徒歩 1 分